2010 年度　立命館学校教育研究会　総会・分科会

＜目次＞

立命館学校教育研究会総会

・2010 年度　年間活動報告

・2011 年度　年間活動計画

・2011 年度～2012 年度　運営委員一覧

立命館学校教育研究会分科会

・第 1 分科会

・第 2 分科会

・第 3 分科会

総会の様子

第1分科会の様子

第2分科会の様子

第2分科会の様子②

第3分科会の様子

懇親会の様子

2010年11月28日（日）に、100名を超える校友教員や教育関係の方々にご参加いただき、2010年度立命館学校教育研究会総会・分科会を開催いたしました。今回は、当日の模様をお伝えいたします。

立命館学校教育研究会総会立命館学校教育研究会運営委員の中西仁（産業社会学部准教授）の司会により、 2010年度総会が始まりました。
最初に、立命館学校教育研究会会長　﨑野隆より挨拶を行い、引き続いて、立命館大学を代表して、教学部長の春日井敏之より本学における教職教育の現状報告を行いました。

次に、運営委員（副会長）の七里源一より、 2010 年度の活動報告が行なわれた後、会長の﨑野より、 2011～2012 年度の運営委員の提案が
あり、満場一致の拍手をもって承認されました。

　最後に、2011 年度の活動計画について、運営委員（副会長）の井上政嗣より提案があり、総会出席者の拍手をもって確認されました。

★ 2010 年度　立命館学校教育研究会年間活動報告 ★

1．2010 年度の活動方針

（1）卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする者の交流、ネットワーク形成のための取組みを
　行ないます。
（2）教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。
（3）学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。
（4）電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。
（5）その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

2．年間活動報告について

年間活動内容

4 月　運営委員会
5 月
6 月　【主催】講演会
　＊6 月 6 日（日）立命館大学校友会ホーム・カミングデー連携企画として開催
　運営委員会
7 月
8 月　【主催】若手教員懇談会
　運営委員会
　メールマガジン発行（1）
9 月
10 月
11 月　【主催】総会・分科会（研究会）
　運営委員会
　メールマガジン発行（2）

12 月　【後援】2011 年度採用　教員採用試験合格者祝賀会（教職教育推進機構主催）
1 月
2 月　　メールマガジン発行（3）
3 月

1）講演会について
日時： 2010 年 6 月 6 日（日）14：30～17：00（懇親会 17：00～）
会場： 立命館大学　衣笠キャンパス　創思館カンファレンスルーム
講師： 小野田 正利氏（大阪大学大学院人間科学研究科教授）
演題： 「今、教師に求められる実践力～保護者と向き合う気持ちと教職員の共同性～」
参加者数：約 140 名（懇親会　約 50 名）

小野田氏は教師の同僚性の形成に触れて、「一見無駄と思える時間と空間の共有から育つ。汗と笑いの中で育つ」と強調された。同時に、
教師の実践力について、「教科指導の力」「子どもをとらえる力」を指摘され、保護者と対応する力は、経験によって積み重なっていくものであると話された。非常にエネルギッシュでユーモアにあふれ、具体的な事例を織り交ぜた講演には参加者の共感が広がった。

2）若手教員懇談会について
日時： 2010 年 8 月 7 日（土）13：00～17：00
会場： 立命館大学　朱雀キャンパス　多目的室
参加者数： 約 30 名

「ゆれつつ働き続けるために―学校の人間関係とメンタルヘルス―」をテーマに、小学校、中学校・高等学校の二つのグループに分かれて、
分散会協議を行った。各グループでは代表者から実例報告を行い、参加者間で各学校の現状や取り組みを紹介するなど、懇談を深めた。

3．会員登録について
2010 年 11 月 25 日（木）現在、1,232 名の方に会員登録いただいております。

★ 2011 年度　立命館学校教育研究会年間活動計画 ★1．2011 年度の活動方針

（1）卒業生教員や本学教職希望学生および立命館教職員をはじめ、教育に関わろうとする者の交流、ネットワーク形成のための取組みを
行ないます。
（2）教職を志す本学学生の力量向上に資する様々な取組みを行ないます。
（3）学校教育に関する研究会・講演会等を開催いたします。
（4）電子媒体を基本とした方法で、ニュースを発行いたします。
（5）その他、会員の皆様へ情報を随時発信いたします。

2. 年間活動計画について（予定含む）

	年間活動内容
4月	運営委員会
5月	メールマガジン発行（1）
6月	【主催】講演会 運営委員会
7月	
8月	【主催】若手教員懇談会 運営委員会 メールマガジン発行（2）
9月	
10月	
11月	【主催】総会・分科会（研究会） 運営委員会 メールマガジン発行（3）
12月	【後援】2012年度採用　教員採用試験合格者祝賀会（教職教育推進機構主催）
1月	
2月	メールマガジン発行（4）
3月	

3. 学校教育研究会のホームページの運用について
（1）講演会および各種イベントのご案内をさせていただきます。
（2）会員の皆様方に、情報交換や交流をして頂ける場として運営させていただきます。
（3）教職教育に関わる情報提供を随時させていただきます。

< 2011～2012年度　立命館学校教育研究会 運営委員・役員について（敬称略） >会　長

崎野　隆 立命館大学教職教学推進機構　前副機構長
立命館大学教職支援センター　前センター長

副会長	七里　源一	元　滋賀県教育委員会
副会長	井上　政嗣	雲雀丘学園小学校　教諭
運営委員	村上　晃美	元　羽曳野市教育委員会　教育委員長
運営委員	西山　隆史	京都市教育委員会　参与
運営委員	岡本　真一	神戸市立摩耶兵庫高等学校　教頭
運営委員	山本　佳苗	岸和田市立山滝中学校　教諭
運営委員	近松　浩平	京都市立桂東小学校　教諭
運営委員	文田　明良	立命館中学校高等学校　副校長
運営委員	畑中　敏之	※立命館大学教職教学推進機構　副機構長 立命館大学教職教学運営委員会　委員長 立命館大学教職支援センター　センター長 （立命館大学文学部教授）
運営委員	中西　仁	※立命館大学教職教学運営委員会　運営委員 （立命館大学産業社会学部准教授）
運営委員	角田　将士	※立命館大学教職教学運営委員会　運営委員 （立命館大学産業社会学部准教授）
運営委員	小泉　良一	※立命館大学教職支援センター　主任（衣笠）
運営委員	宮下　ゆたか	※立命館大学教職支援センター　主任（BKC）
運営委員	長野　光孝	元　立命館大学教職支援センター嘱託講師
運営委員	入江　嘉明	元　立命館大学教職支援センター嘱託講師
運営委員	春日井　敏之	※立命館大学教学部長 （立命館大学文学部教授）
運営委員	池田　伸	※立命館大学教学部副部長 （立命館大学経営学部教授）
運営委員	徳永　寿老	※立命館大学教学部　次長
運営委員	植木　泰江	※立命館大学教職教育課　課長
事務局		立命館大学教職教育課

●これまで、附属校から 1 名の運営委員を選出していたが、本会発足時から附属校も 4 校と広がっていることもあり、
2011 年度より、附属校から 2 名の運営委員を選出することとしたい。
●任期は 2011 年度から 2 ヵ年。
※印＝立命館大学より選出されている運営委員については、人事異動により任期内であっ

ても交代する。

★立命館学校教育研究会　分科会

立命館学校教育研究会総会後に、分科会を開催いたしました。

3つの分科会の内容をご紹介いたします。

＜第1分科会＞「NIE（Newspaper In Education）の望ましいあり方とは」報告者：立命館大学産業社会学部准教授　角田 将士 氏

司会：運営委員　﨑野 隆

記録：運営委員　入江 嘉明・西山 隆史・宮下 ゆたか

（参加者　約25名）

運営委員　﨑野の司会のもと、参加者全員の自己紹介の後、角田先生からの報告を受けました。冒頭に、『NIE(Newspaper In Education)』＝『新聞に教育を』を教科指導の中で進める時は、「教科教育の目標に応じた新聞記事の活用を考えること」、「カリキュラム上の位置づけを明確にすること」などが重要である旨、指摘されました。続いて、NIEは、「よりよい教科教育を進めるためのものであり、教師は子ども達から出てくるであろう質問（「先生、教科書があるのになぜ新聞を使った授業をするの？」）に対する明確な答えを持って実践しなければならない」。つまり、望ましいNIEのあり方とは「なぜその時間に、その内容の新聞記事を、その方法で取り上げなければならないのか？　という問いに明確に答える実践」ではないか、と貴重な問題提起をされました。また、授業目標との関わりから、記事の内容に着目した3つの活用類型（「社会的事象を理解する」、「社会的事象について読み解く（熟考する、批判する）」、「社会的事象について自己の意見を主張する」）を紹介されるなど、具体的実践例とともにお話しがありました。

報告の後、質問・意見交流があり、NIE実践研究指定校に勤務されている先生からは、「今のNIEの状況を見ていて、新聞を使った授業をすれば何でもできる、というような"新聞宗教"的なところがあるのではないか」などの意見が出されました。また、他の参加者からは「総合的な学習時間や選択授業の時間減のなかで、普通の教科の時間を使ってのNIEは難しいのではないか」、「一昔前の資料的扱いとしての新聞利用といったやり方にもどっていくのではないか」などの意見も出されました。

休憩後は、『イルカ漁の町　苦悩』（朝日新聞　日刊2010年7月1日付）の記事を用いて、参加者が実際に、授業実践プランをたてる作業に取り組みました。ワークシート記入後、小学校・中学校・高等学校と3つの分散会に分かれて、熱心に学習・討論が進みました。

まとめでは、分散会での討論を踏まえて、「新聞よりもネット、TV などをメディア・リテラシーの中心にすえるべきではないか」、「NIE 教育を進めていくうえで特に注意すべきことは」などの問題提起・質問が出され、参加者の熱心さを反映して予定時間を 15 分ほどオーバーして分科会を終えました。
（文責：運営委員　宮下ゆたか）

<第 2 分科会>　「一人ひとりの居場所をつくる学校づくり」　報告者：　京都学園中学・高等学校学校長　佐々井 宏平　氏
司会：　運営委員　岡本 真一
記録：　運営委員　小泉 良一・七里 源一・山本 佳苗
（参加者　約 45 名）

1. 実地（現地）へ行け。つべこべいうな、汗と足で書け
立命館大学の卒業生である佐々井氏は、「実地（現地）へ行け。つべこべいうな。論文は、汗と足で書け」と、学生時代に地理学科の先輩方から教わったこの言葉を今も大事に思いながら、ご自身の体験を織り交ぜ、熱くエネルギッシュに話を始められた。
まず、先生は学校の役割について、「授業が終わったらすぐに帰ろうか」と生徒たちに思われる学校は、学校としての値打ちがない、と述べられた。生徒たちが「次は○○先生の授業や〜。楽しみやな」と思える授業、教員も「よし、今日は一発かましたろか」と意気込んで授業準備に取り組み、保護者の方も「今日の学校はどうやったんやろ。子どもから話が聞きたいな。そして私たちもがんばろう！」と思えるような、学校運営・学校づくりを目指している、と語られた。

2. いつかプロ！今、本気！
39 歳で学年主任となり、ある日の学年集会で生徒たちに話をしようと思った時のことである。目の前の生徒たちがこの地球上で活躍できるために何が出来るだろうか、生徒たちが次の居場所に向けてどう育っていくのか、を考えた時、フッと「いつかプロ！今、本気！」という言葉が浮かんだ。10 年後、生徒たちがそれぞれの分野で活躍するためには、今、（生徒も教師も）本気でやらなくてはならない、という佐々井先生の哲学とメッセージが生まれた瞬間であった。その熱いメッセージが生徒たちの心に響き、その後、生徒たちと廊下ですれ違うと、「今、本気やで」とか、「いつかプロやんなぁ」と話しかけてくる生徒が増えた。また校内の雰囲気も、その言葉が浸透するにつれて変わってきた。教員も生徒も「本気の覚悟」が生まれた。
佐々井先生が校長になった今、『7 時半から 7 時半（7:30〜19:30）』の合言葉の下、生徒たちの可能性を伸ばすべく、早朝から夜遅くまで生徒と教師が学校にいる。当初、一部の生徒

と教師が、「運動部だけでなく、勉強でも朝 7:30 から活動したい」との申し出があった時、「そんなん続かへんで…」と、佐々井校長は内心思っていた。しかし、現在、「本気になった」生徒たちが続々と「7:30 の教室」に集まっている。

3. 世界に出る

京都学園では高校 2 年時に全員が世界に出る。創立者の辻本光楠先生ご自身の体験・建学の精神に基づき、世界で堂々と通用する人間力の育成を目指す。修学旅行をカリキュラムの一部に組み込み、生徒は様々な体験をすることができる。外国語学習・異文化体験のみならず、他の国の留学生から自分の考え方が甘かったことを指摘されたり、ホストファミリーの温かい応対に心打たれたり…、自分自身を見つめ直し、将来をどう生きるかを模索する貴重な経験となっている。佐々井先生は「楽しい事だけでなく、鍛えられる内容」の重要性を語り、また「高 2 のこの時期にこそ、逆境に敢えて立ち向かうことによって得るものの大きさは計り知れない。17 歳の出会い・苦悩・逆境・覚悟は絶対に必要である。」と力説された。今では卒業生が海外で活躍し、後輩へメッセージを送ってくるようになった。
分科会会場からは、「全員が、成功するとは限らない。そのような生徒にはどう接するのか？」との質問があった。それに対して佐々井先生は、「第一志望がベストだが、第二、第三志望の進路が悪いことではない。目標を達成する過程で、生徒はそれを支える周りの力を実感する。そして自分を前向きにコントロールできる力も身につける。過程を本気でがんばった人間なら、物事を客観的に判断し意味づけをして、さらなるステップへと踏み出せる。そこで止まらず常に前向きに生きられる。」と、熱く語られた。満席の教室で、二時間があっという間に過ぎ去った。
（文責：運営委員　山本佳苗・岡本真一）

＜第 3 分科会＞　「学ぶ心を育てる」
報告者：　立命館小学校教諭　吉川 裕子　氏
司会：　運営委員　文田 明良
記録：　運営委員　井上 政嗣・近松 浩平・中西 仁・長野 光孝
（参加者　約 35 名）

発表者は吉川裕子氏。吉川氏は、産業社会学部 2001 年 3 月卒業の後、2001 年から 2005 年まで北海道標津町立忠類小学校勤務。2005 年、立命館小学校設置準備室を経て、2006 年から立命館小学校に勤務。現在、2 年生の担任をされている。

吉川氏が、立命館小学校で子どもに学ぶ心を育てる授業を展開されるようになった背景には、「なかなか子どもが学びに向かってくれなかった」という北海道の小規模な小学校での経験が大きい、と話された後、立命館小学校での授業実践について発表された。

立命館小学校での実践については、「学びたい意欲を大切にしながら、学ぶための力を身に付けさせる」という理念を根本にされていること。意欲を育てるために、漢字の授業や算数の授業の中で「はてな」学習を実践されていること。「もっと調べたい！もっと考えたい！」の心を子どもに育てるために、丁寧な日記指導・調べ学習指導を行われていること。学級通信をこまめに発行して、家庭も巻き込みながら、個々の子どもの学びを全体に紹介し、子どものやる気を引き出していること。「みんなで学びを深めていく」ために、個々の子どもに積極的に全体の場で発表させ、友だちからの質問に答えさせる取り組みや、国語の授業における学級の座席表を利用した子どもの感想や疑問の交流を行っていること。以上を、具体的な教材や子どもの様子を交えて発表された後、子どもに基礎・基本の事柄を定着させることの難しさや、日記・調べ学習も家庭の事情によって子どもに差が出来ることなどを課題としてあげられた。

吉川氏の 40 分程度に及ぶ実践発表の後、意見交換が行われた。吉川氏の提案が実践的で興味深い物であったので、活発な議論が展開された。公立小学校でこの実践が可能かという点、基礎・基本を確実に習得させる学習活動と子どもの興味関心に焦点を当てた授業をどう両立させるのかという点、学びの集団づくりをどう進めるのかといった点が議論の柱となった。それぞれ勤務する学校や子ども実態に違いはあるものの、吉川氏の「学ぶ心を育てる」という提案については、参会者全員が深く共鳴するところであり、分科会自体が「学びの共同体」となった。
最後に、多くの若手教員に参加していただいたことを特に付け加えておきます。
（文責：運営委員　中西仁）

分科会の報告は以上です。
2011 年度も、講演会や分科会（研究会）等の様々な企画を予定しております。併せて、電子媒体を中心として、メールマガジンを
発行いたします。本会ホームページ上での交流もあわせ、皆様のご参加、ご協力をよろしくお願いいたします。

次回号は、 2011 年 6 月に開催の講演会のご案内を予定しております。